



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	牧洋『善霊』論：その自己批評性と、日本語認識の多層性をめぐって
Author(s)	宮崎, 靖士
Citation	国語国文研究, 140, 1-16
Issue Date	2011-09-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93216
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_140-01-16.pdf



牧洋『善霊』論

——その自己批評性と、日本語認識の多層性をめぐって——

宮崎靖士

I

かつて牧洋^{（一）}という作家がいた。彼は、アジア太平洋戦争の準備・展開と並行して朝鮮における「皇民化」政策が強化される一九四〇年代前半に朝鮮文壇で活躍した文学者である。牧洋に対する「日本」における評価に関しては、例えば川村湊氏による、「人に先駆けて創氏改名を行い、率先して皇居、伊勢神宮、出雲大社などをめぐる『聖地参拝』に参加し、積極的に『国語』（日本語）による『国民文学』の創造に努めた」という理解が公約数的なものだといえる。そのような牧洋の動向を端的に示す代表作として理解されてきたのが『静かな嵐』三部作^{（二）}である。これらは一九四三年四月に国民総力朝鮮連盟が主催する国語文芸連盟賞を授与され、同年六月に創作集『静かな嵐』（毎日新報社）に収録された。

そして牧洋は、そのような『静かな嵐』の「後日譚」として『善

霊』^{（三）}（『国民文学』一九四四年五月）というテキストを残している。

この『善霊』は、『静かな嵐』の場合と同名の主人公を用意した続編として理解できる。しかしここで重要になるのは、この二作品の主人公が自身を変化させるべく努力と行動を続けるという共通点をもつ一方で、その努力や行動の内実（方向性）とその結果辿り着く地点が全く異なる点であり、本論はまずこの点に注目する。

またその一方で、『静かな嵐』や『善霊』を含む一九四〇年代に発表された日本語文学作品に関しては、「皇民化」政策の一環として日本語使用への圧力が強化される時代状況で執筆された点、そしてそのような状況は、日本語で書くことの意義や方法、および日本語という表現媒体がもつ歴史性や政治性等に関する鋭敏な自意識を、朝鮮出身の（ある一部の）作家達に促した契機としても理解し得る点に着目した分析が不可欠になるのではなからうか。即ち、そのような時代状況の中で、同時期における「内地」の作家以上に、切実に日本語と向き合うことから紡ぎ出されたであろうテキスト群は、何

よりも表現論の立場と方法から分析され、その価値を日本語使用をめぐむ状況との関わり方から改めて見出されるべきだと考えられる。

そこで本論では、『善霊』を『静かな嵐』の「後日譚」として分析する立場を選び、一旦は『静かな嵐』において完結させた主人公の動向を、改めて別のものへと書き直した牧洋の動向を、その日本語使用へのスタンスと不可分なものとして明らかにすることを目的とし、そのような試みがもち得る価値にまで言及する。そしてそのために、『静かな嵐』と『善霊』をともに物語論の観点——具体的に、作品の展開を通じて主人公が何を手に入れたか、あるいは何になつたか。そして、そのプロセスに何が用意されているか、という点での注目——を軸として検討することと方法面での眼目とし、そこから浮き彫りにされる両作品の間にある継続性と、『善霊』が提示する『静かな嵐』からの「ずれ」の双方を検討していく。

以下、本論ではIIにおいて『静かな嵐』に認められる物語論の観点から整理できる特質を、日本語使用をめぐむ時代状況とそれに対する牧洋の向き合い方とともに検討する。そしてIIIとIVにおいて、『善霊』におけるそれらの問題をより詳細に論じる。その上でVでは、それらの検討成果を総合しつつ、右に述べた本論の目的を達成したい。そのような本論の試みは、例えば林鍾国氏が『善霊』に関して提示した、日本軍の敗色が窺われ出した時局において、朝鮮の知識人がそれまでの戦争協力に対する「自己嫌悪」や「懷疑」を抱くに至った状況を描いたものとするような見解とは異質な価値を、このテキストから見出していく営みとなるだろう。

II

そこで一旦、『静かな嵐』の検討へ移行しよう。この作品は、語り手が主人公と同一人物ではなく、かつ作中人物としても登場しない、いわゆる三人称的な語りによって構成されている。この作品の展開を通じて、しばしばその内面に焦点化される主人公は「朴泰民」という名の朝鮮人作家であり、「文人協会」が主催する「時局講演隊」の一員に指名されるところからストーリーがはじまる。その「第一部」と「第二部」は、約一週間にわたる時局講演旅行の様子やそこで生じた出来事、及びそれらをめぐむ主人公の感慨や葛藤を中心に記される。そして「第三部」では、講演旅行の終了までと、その後の約一年半にわたる期間に生じた時局の展開を背景としつつ、講演旅行の報告座談会や主人公における新聞社への就職と退職、そして「内地」への「聖地参拝団」への参加等を通じた主人公と周囲の変遷が描かれる。その間には、講演隊のメンバーとして主人公と同行した朝鮮人作家や「内地」の文人達、及び講演先の役人、聴衆や新聞記者、更には主人公と旧知の文学関係者等、多くの人物が登場する。本論では、そのような『静かな嵐』がもつ物語の枠組みを、冒頭で述べた物語論の観点から確認していきたい。そこで、作品のはじめと終わりにある一節に目を向けよう。すると冒頭には、時局の中で「作家としての自分の在り方を見出し得ずに苦悩して」と語られる主人公の「決意」が、次のように記されている。

この地に作家として生き抜くためには、どうしても一応この嵐の時代を通りぬけなければならない。それは単に無意識に生活することではない。意識的に時代を呼吸することだ。それがためには先づ小乗的な民族的立場を一応揚棄しなければならぬ。より高い大乘的知性と叡智が必要なのだ。

そのような決意に基づく主人公の言動を追跡するものとして、『静かな嵐』の物語内容は方向付けられている。そしてその到達点として、作品の終盤には、朝鮮における徴兵制実施の決定に触発されつつ、「あゝ！たうたう朝鮮はこゝまで来たのだ。自分が声高らかに叫んだことが、現実裏付けられて行くのだ。自分は正しかった！俯仰天地、少しも自分の言行に恥る所ないのだ」とする主人公の感慨が記されることとなる。

即ち『静かな嵐』は、主人公における「皇民化」の選択が、時代状況にも後押しされつつ正しいものとして実感されるまでのストーリーとして、まずは整理できる。そこで注目されるのが、そこへ至るプロセスとして、「朴泰民は然し多くは深い懷疑の中にさまよった。意識は分裂し争ひ、そして結末に到達されなかつた」のように内面の葛藤が強調して記されたり、あるいは朴泰民の転向を良しとしない旧知の文人やかつての愛読者、講演会における聴衆等との軋轢・不調和が主人公に焦点化されつつ次のように描かれる点なのである。

彼は壇上で、照明の明るくない場内に、無数に輝く黒ダイヤ

の眼を見た。その無数の眼は、真剣に何かを追求する眼であつた。然し中には彼の熱弁に対して、ふふんと鼻笑ひを以つて酬ゐるものもかなりあつた。何をほざいてゐやがるんだといったやうな、不敵なあざけりであつた。弱気の朴泰民はそれらに出会はずして少なからずこたへた。

朴泰民における同様の煩悶は、朴の講演に不満を抱く新聞記者が主人公に詰め寄る場面でのやり取りにも認められる。従来このような場面は、牧洋における「皇民化」の選択に対する「迷い」の現れとして注目されてきたといえる。それに対して本論では、そのような筆致を、「皇民化」を指向する主人公とは異質な立場性を作中に持ち込み、ダイアローグ的な状況をテキストに実現する要素として把握し、ただしそれが（『静かな嵐』を創作集でまとめられるような三部作として検討する限りにおいて）主人公が最終的にそれらを乗り越え、自らの選択に対する肯定感を得るまでのプロセスとなり得ている点に注目したい。すると『静かな嵐』は、数々の障壁を乗り越え、「皇民化」へ向けた努力を続ける主人公が、最終的に周囲や状況との調和（を得たという自覚）に至りつつ当初の目的を達成する、一種の「成長物語」あるいは「教養小説」として要約可能になるのである。

そのような物語の枠組みをもつ『静かな嵐』に対する、同時代の評価を確認しておこう。例えば、杉本長夫「連盟賞の牧洋君」（『国民文学』一九四三年五月）には、「内容的には相当政治的意図が盛られてゐるにも拘らず、感情の細かさや温かさが失はれなかつた」

点を良しとし、「所謂『決意の文学』」にしっかりと立つ君に、私は満腔の声援を惜まないものである」とする評がある。また、鄭飛石^{鄭飛石}「新刊評 情熱の書『静かな嵐』」（『国民文学』一九四三年一〇月）には、当時の混沌とした時代状況の中で「牧洋氏は大胆にも時代的宣言として我々の前に『静かな嵐』を投げつけた」と回顧されつつ、「それは独り作者だけの脱皮作用ではなく、実に全朝鮮民衆のその前駆であつた」と述べられている。

ここで評価のポイントとなっている、周囲に先んじた「脱皮作用」や「決意の文学」というタームは、単行本収録の際に付された作者の「あとがき」とも対応しつつ、同時代とそれ以降に、『静かな嵐』や牧洋という作家を評価するうえで踏襲されていくものとなる。

そこで注目しておきたいのが、右のような牧洋に対する評価の背景をなす、朝鮮における「国民文学」運動の概要である。この運動は、一九四〇年秋の「内地」における近衛新体制の確立以降に朝鮮文壇でなされた「国策」に追従する文学への転換をめぐる議論の総称であり、特に四一年八月における朝鮮語雑誌の統廃合を経て、同年一月に新たに創刊された『国民文学』⁽⁷⁾等を主な掲載誌として展開された。その後四二年半ばには朝鮮文人協会が「国民文学の建設」をその綱領に掲げるに至り、同年末までには朝鮮文壇における「国民文学」への転換は完了したとされる。このように朝鮮文壇の趨勢が「国民文学」論を経て「皇民化」の手段としての文学へと転換していく潮流に先駆けるものとして、「国民文学」の旗手、あるいは「革新サラブレッド」⁽⁸⁾のように、牧洋とその『静かな嵐』に代表される作品群は評価されたのである。

本論の検討において更に重要となるのは、そのような文壇動向の中で、日本語使用が推進されるべき重要項目として掲げられていた点なのである。例えば、そのような状況を端的に示す、「私が国語で文学を書くについての信念」（『緑旗』一九四二年三月）という特集の中には、六人の文壇人からの返信の中の一つとして、牧洋による次のような見解（『国民文学は国語で』）が認められる。

一人の完全な国民になるために国語で書くのだ——と云ふ
気持が今強い。作家である前に、私は国民であらねばならぬのだ。国民文学もそこから出発するのではないか。そして新しい酒は新しい器にもらねばならぬ。国民文学は国語で書かれるべきであらう。先づ以上の如き信念に徹したい——黙々と
て

すると『静かな嵐』については、日本語で書くという創作行為を自らを「皇民化」する手段として採用した作家が記した、「皇民化」へむけた主人公の「成長物語」として把握することが可能になる。換言するならば『静かな嵐』は、日本語使用を仲立ちとして、創作行為とテキストの内容という、双方の面にわたり「皇民化」への決意を実践する試みであつたことがわかるのである。果たしてそのような「日本語」との向き合い方から生み出され、同時代には「国民文学」のいち早い代表作として評価された『静かな嵐』に対して、『善霊』はどのような言葉の企てを新たに試み、一旦は確立された自らの執筆スタイルや評価をどのような方向へ操作しようとしたの

か。それらのことを次に検討していこう。

III

『善霊』は『静かな嵐』とは異なり、一人称の語りによって構成されている。ただしその狙いは、語り手の告白として『善霊』のストーリーを展開させるためではなく、『善霊』の執筆意図を『静かな嵐』の続編として明言させたり、主人公と自身とが同一人物でありつつ、しかしその間になお差異が存在することを強調しながら、随所で主人公の言動に批評を加える点に求められる。そして、そのような語り手から「彼」として名指される主人公は、『静かな嵐』と同じ「朴泰民」という名の朝鮮人作家であり、ストーリーは、主人公が「一種の御用団体」に参加したことを発端として展開される。その中で、主人公が尊敬する先輩作家や「御用団体」の幹部連と団員たち、あるいは主人公が積極的に参加する神社参拝や軍事訓練の関係者、ひいては旧知の青年等が登場し、彼等との間で生じる摩擦や葛藤を中心として、物語は展開されていく。

そこで本論では、やはり『善霊』における物語の枠組みへと目を転じたい。物語のモチーフ（＝語り手の動機）は、『静かな嵐』の中で、朴泰民の小さな魂の発展史を試みたとする語り手が、「朴泰民のその後の生活について、私は夙から読者諸氏に報告すべき義務を感じてゐた」と述べる一節の通りだと理解できる。そのうえで注目されるのが、主人公のキャラクター設定に関する、やはり作品の冒頭に用意された次のような記述である。

さて、彼が一つの真理（ひらき直らずに真実といつてもよい）を求めて、或る団体に身を投じたことは、これも読者諸氏がすでに御承知の通りである。

彼にもし、野心があつたとしたら、エゴイストの彼のことから、自分の魂のより高い発展、よき芸術を生むこと以外にはなかつたといはう。これは、彼自身を描いては、神のみが知る所である。／このことは、彼が一年も満たずして、その団体を飛出したことからみても分るのである。（中略）それまでも、自分の魂を發展させ得ないと感じるや、敢然として大事な職業を投出したことが一再ならずあつたのだつた。

ここには、「真理」や「真実」そして「自己」や「自分の魂」の「発展」——それらを本論では「自己の向上」への指向として総称しておきたい——をモットーとし、過去においてはそれを「職業」よりも優先させることもあつた主人公の像が認められよう。

それに対し作品の結末には、「生活的に非常な苦難の中」にある主人公が、満州で暮らす弟の病の知らせにも促され「大陸へ行かう。そこには叔父が居る。そこで生活を見出さう」と決意する一節や、弟の死を契機として「つひに死は弟の上になつて来た。北国の荒々しい秋と共に、一人の若者は去つた。朴泰民はもう一度奮ひ立つて、生活とたゞかひ始めた……」とする件りが認められる。

即ち『善霊』は、「自己の向上」をモットーとしていた主人公が「生活の必要」に基づく選択として朝鮮を離れるまでのストーリーとし

て、まずはその枠組みを把握できるのである。ただし重要なのは、『善霊』におけるそのような二つの文脈を一つのプロットとしてまとめあげている要素であり、それを理解するには、その間のプロセスへの注目が必要となるだろう。果たして、そのようなプロセスとは如何なるものであり、どのようにして「静かな嵐」における「成長物語」との異質さを演出しているのか。

そこで注目されるのが、右に確認した「自己の向上」をモットーとする主人公に付与されているもう一つの性向としての、自己の分裂（「二面性」）の拒否——「裏表のない生き方」の希求——であり、『善霊』では、主人公がそのような生き方を求めて苦悩するのである。このような性向を本論では、「自己の向上」というモットーに由来しつつ、具体的な個々の状況や出来事に応じて浮上する傾向として把握しておきたい。

そのような主人公の苦悩と、その描写がもつはたらきとを明瞭に確認できるのが次の文例である。ここには、主人公の「御用団体」への参加を良しとせず、その真意を問い正し脱退をすすめる「尹」という先輩とのやりとりが描かれている。なお、この場面の前に主人公は、団体への参加の理由を「私が正しく生き、そして民族が人類が真実に生きる真理」を得るためだと述べている。

『尹先生、私を心から惜しんで下さるのはありがたいですが、ついこの間入ったばかりですからね。それに私なりの考へがありますから……尹先生には、私の苦しみ^{くしみ}が知らぬのです。』と口早やに云った。朴泰民は自分の感情とはまるつきり反対のこ

とを、臆面もなく語つてゐるのだつた。（中略）／（本当に私の尊敬に値する先輩なら、そんな口はきけない筈です。あなたは私を思ひやつてゐる風に、偽善を装つてゐるだけです。六人の大家族を背負つて、やつと職にありついた私ぢやないですか。真理探究なんて空想として、私達の生活が保障されるだけでも、大きなことです。あなたは辞めると無責任なことが平気で云へるけれども、私には責任があるので——家族を食はせねばならない。／かういふ風に云つてやりたかつたのである。それを『尹先生ありがたいですが——』とは何事だ。嘘^{うそ}づきの朴泰民野郎！何故^{なんぞ}真実が堂々と云へないのだ。何故自分の良心通りのことが、云ひ切れずに、仮面をかぶるのだ。

ここでは、二重鉤括弧で括られた、物語内の現在時における主人公から「尹先生」へ向けた発話に続き、本論が傍線を付した箇所において語り手が（いわば語り手の現在時から）、それとは異なる主人公の本音が存在したことを述べている。そしてその本音については、件の場面では発話されなかったものとして丸括弧で括られつつ、語り手によって紹介される形で記されている。そこから更に、破線を付した部分において、再び語り手の言葉として、物語内の現在時にいる主人公にむけた叱責がなされていることがわかる。そのように錯雑とした語りの手法をあえて用いて、ここで目論まれている事態とは何か。それを次には、この場面で語られている事柄の内容に即して確認していこう。

注目されるのは、主人公におけるその本音とは異なる言動に対す

る（語り手からの）批判がなされている一方で、特に右の丸括弧内の文章において、自らの「真理探究」を「空想」とし、「生活」の「保障」を優先させる主人公のメンタリティーまでが書き込まれている点である。つまりここでは、「自己の向上」をモットーとする（とそれ以前には語り手によって語られていた）主人公が、「裏表のない生き方」を指向し、そしてそうであるが故に葛藤する意識の中で、「自己の向上」よりも優先される「生活の必要」という要素が浮上してくる次第が確認できよう。そのような事態は、語りの現在時から介入してくる語り手の動向を通じて、物語内の現在時において主人公が抱いていた本音を浮き上がらせ、そのような感情を（右の引用文における）傍線や破線を付した部分の語りによって主人公が以前から抱いていたものとしつつ、以降のストーリー展開における新たな行動原理として配置する筆致としても換言できるだろう。そしてそのような語りによって定着される主人公の行動原理は、先に確認したような、作品の結末で満州へと旅立つ主人公の姿によって具現化されるのである。

すると『善霊』のストーリーは、主人公が「生活の必要」を重視するという本音にもついていた行動を裏表なく実行することができるようになるまでを描いたものであることが新たに見えてくる。そのような事態はまた、「自己の向上」への指向が、このテキストの展開の中で表向きの「建て前」として意味づけられていくことを意味するだろう。ここにおいて、『静かな嵐』における「皇民化」という明示的な一つの到達点へ向けた「成長物語」とは異質といえる、『善霊』がもつ複数の指向性に支えられたプロットが露わになるのであ

る。そして、そのような展開を作中にもちこみ、かつ支える要素として、『善霊』における語り手の機能と役割を正しく把握することが可能になるのである。

IV

そこで更に重要となるのは、右の引用部や更に後の場面において、主人公における「裏表のない生き方」への指向が繰り返し登場する一方で、一般的には「人格の向上」として理解されるであろうものとは異なる主人公の言動が顕在化してくる点なのである。そしてそのような事態は、「皇民化」へ向けた錬成に関する諸行事や機構への参加を通じて展開されていくことになる。

それは、主人公が自身の二面性に対して「これではいけない。このまゝだと俺は破滅だ」と葛藤し、「高い一つの人格に統一し、きたへて行かねば、暗い深淵があるのみだと感じる。（信じよう。われから先づ信じよう。そして自分をたたき直さねばならぬ）」という決意から、「団体」が主催する神宮参拝へ参加するところから始まる。しかしそのような決意から参加した神宮参拝を、朴泰民は、参拝の列への横入りを「中村」という「団体」の幹部に咎められたことから放擲してしまう。その次第をめぐる、次のような主人公の感慨に注目しておこう。

（もう参拝は終わった時なのに）婦人たちのゐる大勢の面前で恥をかかせる中村のやり口を、朴はどうしても悪意のこもった侮

辱以外には解釈出来なかつた。何の為の侮辱だらう？　これが規律といふものか。これが訓練といふものか？　どう考へても、それは要するにくだらない事だつた。もはやその瞬間に、朴の態度は極まつたのだつた。（こんなケツの穴のせいまいおいほれが、幹部づらをしてのさばる団体なんか、さつさとおん出てしまへ。）と。／その後朴は自分をみがくつもりで、軍の報道演習にも加はつた。これは彼のために、非常に尊い生活の一頁であつた。

ここでは、「中村」の叱責のしかたに不満を抱き、参拝のみならず「団体」の脱退にまで至る主人公の姿が認められる。ここで朴泰民が怒りを覚えた「中村」の対応は、それ自体妥当な側面をもつものでもあり、しかしそれへの顧慮を伴わずに「中村」の態度のみを批判する主人公の姿からは、その言動にわたり、「人格の向上」へ向かうことはない、軽率、短慮で粗野とよぶべき性向がむしろ浮上することになるだろう。ただし朴泰民においては、そのような衝動的な言動が更に別の手段（ここでは軍の報道演習への参加）による、更なる「自己の向上」への転換を促し、それが結果として「裏表のない生き方」へと近づく契機となつていく点が見逃せないのである。次の引用文は、そのような経緯から参加した軍の報道演習において「アツツ島玉砕」の知らせをうけた折に、主人公がひきおこした知人との諍いをめぐる件りである。

その時、沈といふ同じ演習班の丈の小さい男が近寄りながら、

何とかくだらないふざけ方で、冗談半分に朴をからかふのだつた。（中略）それで朴はむつとして、／『馬鹿野郎！　もう少し慎んだらどうか。』とどなつたのであつた。

先日、訓練から帰る時、沈をどなりつけたのも、朴が平素讓歩し、へり下るのを自身馬鹿馬鹿しく焦れつたく考へてゐたその心理の爆発だつたかも知れなかつた。妙なことに、それからといふもの、朴は沈と話しても、別にへり下るやうなことは、しないのであつた。意識的に心を武装するといふのではなしに、しぜんの状態に肚がすわつたといふ感じだつた。

厳肅な場面で慎みのない行動をとつた知人に、主人公が反感を抱くこと自体に不自然さは感じられないが、ここで重要なのは、そのエピソードがやはり、主人公における「裏表のない生き方」につながるものとされていく点なのである。即ちここで知人の振るまいを怒鳴りつけた主人公は、そのような衝動的な言動がきっかけとなり、それ以前から続いていた心の「武装」が解け、「裏表のない生き方」への接近を実現させていくことになるのである。そのような傾向は更に、作品後半における、朴泰民の思想傾向を良しとしない「玄」という青年との諍いの場面でも認められることになる。

それは燃え始めた新葉に、油を注いだやうなものだつた。朴はその時もはや自分も意識せずに玄に一撃を与へた。（中略）この二三年来鬱積した感情の嵐が、玄に向つてどつと堰を切つて

おそひかゝつた風だつた。

朴はその後永らく、玄を不慙に思ひ、喧嘩には勝つたが、心理的に不愉快な重荷となつてゐた。しかし小さな契機が、人間を発奮させるやうに、玄との一件が朴をもう一步前進させ、朴の中に動もすればきざす弱いものを、ふるひ落す機縁をつくつたのだつた。／＼（俺はもう陰もなく、裏もない。巖のやうに毅然として強く明るい人間なのだ。）

ここでも、主人公を「裏表のない生き方」へと押し進める契機が、「三年来」の「鬱積」を爆発させた暴力沙汰となつてゐることを確認できる。このような展開をふまえるとき、『善霊』において主人公が「裏表のない生き方」を獲得していくプロセスは、例えば読書や調和的な他者との関係を通じた、持続的かつ意志的な努力による「理想的」な人格への接近——即ち、「人格主義」的なもの——ではなく、それとは対照的な言動による、むしろ反人格主義的とよぶべき傾向に貫かれてゐることがわかるのである。

すると『善霊』は「自己の向上」を指向するとされる主人公が、それを「裏表のない生き方」を目指すという形で実践し、それを出来ない自分自身に悩みながらも、感情の爆発や衝動的な言動を通じて自身の二面性に悩まなくなるとともに、「生活の必要」に貫かれた生き方を実践すべく朝鮮を旅立つまでのストーリーとして改めて要約することが可能になるのである。

そこで、そのような『善霊』に関する次のような同時代評を確認

しておこう。『善霊』の掲載号における「編集後記」（『国民文学』一九四四年五月）には「牧洋氏が直接に『静かな嵐』につながる『善霊』を寄せられ」という文言が確認できる。また、一色豪「文芸時評」（『国民文学』一九四四年六月）では「『静かな嵐』以後の牧氏の心境がかなり正直にぶちまけてある」と述べられ、更に「『静かな嵐』などは同じモデル的興味でも、ひたむきな作者の日本的なものへの志向が強いかへつて作品の効果を増した」のに対し、『善霊』は「一体に暗くなつてゐる」点に難があり、「こんなケチないやがらせみたいな作品には感心しない」という評までが確認できる。

以上からは、『善霊』が発表当初より「静かな嵐」との連続性において受容され、しかし『静かな嵐』と比較されるときに、あまり高い評価を得られない——あるいは、『静かな嵐』の続編として期待される要素を満たすことのない——作品であつたことが理解できよう。そしてそのような評価の所以を、本論ではⅢとⅣにわたり検討してきたことにもなる。

果たして、そのような『善霊』の試みは、同時代の朝鮮における日本語使用をめぐるコンテキストと対照するとき、どのような立ち位置を占めるものになるのか。そのことを「日本語文学」の実践に関わる事態までを視野に入れつつ検討し、論の締めくくりとしたい。

V

まず注目されるのは、『善霊』の背景をなしていた、『静かな嵐』の時期とは異なる日本語使用をめぐる状況である。それを明らかに

するために、ここでは次の三つの要素に目を向けたい。第一には、一九四二年五月における徴兵制施行の発表と同時的に朝鮮総督府および国民総力朝鮮連盟の主導により展開された、朝鮮の教育現場と職場、更には各家庭にまで至る「国語普及運動」と、その浸透である。

第二には、それとも並行的に、ただし朝鮮文人協会（やそこに関係する文壇人、出版関係者）が主導した、文学作品における日本語化の進展であり、それは先にその概要を説明した「国民文学」運動の潮流と不可分なものである。そして第三には、南富鎮氏が指摘したような、主に三・一運動以降に生まれ、四〇年代に「国民文学」の書き手として登場する新人群の台頭や、その世代における日本語使用にまつわる葛藤の欠如^{二三}があげられる。そして特に四三〜四四年にかけては、従軍兵士や学生等の体験記もしくはエッセイ的な日本語文章が『国民文学』誌上等に多く掲載されるようになる点も注目されよう。

もちろん右の三傾向は相互に関連性を保つものであり、ここでの区分は相対的なものに止まる^{二四}。そこで次に参照したいのは、牧洋の『善霊』と同号、もしくは前号の『国民文学』誌に掲載された次のような文学評である。これらの評は、右に紹介した三傾向（のうちのいくつか）を背景として現出したものとして理解できる。

例えば田中捨彦「国語文学の前進」（『国民文学』一九四四年五月）には、「半島作家」に期待する文学作品の傾向として、「稚拙な言ひ表し方」や「小学生の作文において見る如き純粋性と単純性」が例示されている。そして更に、「国語作品を書く事によつて、自己を皇道人として鍊成せらるゝと同時に、その国語作品を通じて、多くの

民衆をして真の皇道人たらしむるの幸福を賦与せんがために美しく、立派で、平明な国語作品を生み出すために切磋琢磨せられん事を切望してやまない」という主張が述べられる。これは、右の三傾向のうち、第一と第二のものが合流した地点——即ち、文学作品の書き手と読み手が「平明」な国語作品を仲立ちとして、相互に「皇民化」へむけた鍊成を行うこと——を日本語による文学活動のあるべき姿として提唱しているものであることがわかるだろう。

そしてそのような「平明」さの重視は、次のような主張ともその発想や価値観を共有するといえる。即ち、田中正美「文芸時評」『私の現はれ方を中心として』（『国民文学』一九四四年四月）では、内地人の中学教師と朝鮮人学生との交流を描いた小尾十三「登攀」（『国民文学』一九四四年二月）をとりあげ、「優れた表現技術を持った作者が優れた自己を作家的な客観化をせず、生のまゝで文字にうつした」作品として高く評価し、「国民的自覚を土台にしようとする心構」をもとにした、それぞれの職域において自らの役割を果たす「戦士の立場に立つたまゝ生でぶちつける文学」の必要性を主張している。そのような文学観は、更に石田耕造^{ナエジロ}「崔載端」^{テグン}「まつろふ文学」（『国民文学』一九四四年四月）に至ると、「国民文学」が進むべき次の段階としての、天皇へ仕え奉り「さかしらなる私心を持たぬ」、「まろふ文学」の必要性として理論化されるまでに至るのである。

そのように日本語創作における心情の率直な表現（と理解される書き方）を評価する言説は、右に本論が述べた日本語使用をめぐる三傾向のうち、特に第一と第三の事態を背景として生み出されたものだといえよう。換言するならば、右のような言説は、日常生活の

全般にわたる日本語使用が推進される中で、日本語能力の程度に関わりなく「皇民化」へむけた日常生活の感慨を幅広く表現し、それを共有できるような舞台の継続的な産出の要請に対応する評価基準として理解できるのである。

そこで重要となるのは、それら同時代の日本語創作をめぐる傾向や、そこで推奨される表現の規範とは異質なものととして、牧洋の『善霊』がもつ表現面での諸特徴が位置付けられる点なのである。即ち『善霊』の語り手は、「平明」な日本語表現とは対極ともいえる、一人称の饒舌な語りを特徴としており、そのような語りは錯雑としたプロットを形成しながら、「皇民化」へ向けた鍊成とは異質な事態までを演出すべく努めていた。そしてそのように作家の操作性を殊更に前景化し、「戦士」にもならず、「国民的自覚を土台にしようとする心構」とも異質な「生活の必要」に基づく価値観を露わにし、しかも「優れた自己」ならぬ反人格主義的な言動の果てに朝鮮を旅立つ、むしろ「私心」に徹した存在が、『善霊』の主人公なのであった。すると、『善霊』における日本語使用の特質は、同時代の朝鮮における日本語使用をめぐる状況に同調し、それを更に加速し先導する（例えば、『静かな嵐』における場合のような）ものではなく、むしろそのような潮流に全く反する内容と語り方をもつ作品によつて同時代を「批評」し得る立ち位置を占める点に求められるのではなからうか。すると、先に本論が紹介した『善霊』に向けられた発表当時の不評についても、それがこのような時流に抗するテキストであつたが故のものとして理解できるようになり、そのような不評はむしろ、『善霊』がもつ時局への批評性をより浮き彫りにする要素と

して位置付けられるのである。

更に右の如き批評性は、同時に、過去に自身が記した『静かな嵐』へも向けられていたものであるだろう。そこで、件の『善霊』の特質を、本論がⅡで検討した『静かな嵐』の場合と対照してみたい。

まず物語内容のレベルで、『静かな嵐』では「皇民化」へむかう主人公の「成長」——それは「皇民化」へむけた鍊成を必然的に伴う「人格の向上」としても換言できるだろう——という作品展開が用意されていた。それに対して『善霊』では、そのような「成長」とは異質な、反人格主義的というべき主人公のふるまいを通じて「生活の必要」に立脚した行動を実践できるまでに至るプロセスが記されていた。そしてそのような二作の間には「後日譚」という関係性が明示的に用意されており、一方で『善霊』における件の主人公の動向は、その多くが「皇民化」に関する鍊成行事や機構への積極的な参加を通じてもたらされたものであった。

即ち『善霊』は、『静かな嵐』の主題を継承するものではなく、主人公の名前や状況設定については連続性を確保し、それを強調しながら、しかしそこでこそ際立つ両作品の違いを顕示するテキストとして理解できるようになる。そしてそれは、連続性を前提とした差異を梃子として、『静かな嵐』に貫かれていた価値認識を間接的（あるいは非明示的）に排除するような自己批評的試みとしてまとめられるのである。そこで更に創作行為というレベルでの問題となる日本語使用へのスタンスをも加味するとき、『静かな嵐』では時流に先駆けた「皇民化」の手段としての日本語使用と物語内容の共振が認められた旨をⅡで論じた。それに対し『善霊』では、「皇民化」へむ

けた同時代の日本語使用をめぐる状況に対して、それへの批評を主眼とした創作行為と物語内容の共振へ移行したことを確認できるのである。

ただし『善霊』がもつ批評性は、日本語使用に対する全面的な否定を意味するものではなく、その点を更に検討することは、文学における言語使用をめぐるより大きな問題系へ踏み込むための足掛かりともなり得る。そこで本論では最後に、牧洋が残した日本語テキストから窺われる日本語認識の多層性に目を向けたい。

まず注目されるのが、『善霊』の発表時期の前後にわたり牧洋が『蓬島物語』（『国民文学』一九四三年八月に第一回分が掲載され、一九四五年三月に普文社より刊行された創作集『蓬島物語』に続編が収録される）等の日本語作品を発表しており、特に『蓬島物語』では、李石薰として発表した朝鮮語作品（『黄昏の歌』）の日本語訳を試みている点なのである。即ち、本論が検討してきた『善霊』がもつ批評性とは、自らの日本語創作の全否定へと至るものではなく、過去の自作の日本語訳を通じたりライトや新たな日本語創作と並行する余地をもつものだったのである。それでは、そのような余地を担保する牧洋の日本語認識とはどのようなものなのか。

そこで見逃せないのが、『静かな嵐』の発表期間と並行して牧洋が記した、「新らしさについて」（『東洋之光』一九四二年六月）という文章である。ここには、「国民文学」とその創作言語に関する所感を述べる次のような一節が認められる。

今日いふ所の国民文学の国民とは、「一億の国民」であつて、約七千五百万の内地人と約二千五百万の朝鮮人を包含する所の国民なのだ。その七千五百万と、二千五百万との共通の言葉は国際語即ち日本語であつてその一億のための文学である所の国民文学が、共通の言葉である日本語即ち国語で書かれるべきだということとは、事実そのものを言つた迄であつて、偏狭でも何んでもないであらう。

また、文学は一面普遍性をもつもので、朝鮮語でだつて世界人類が共鳴する傑作を書くなれば、それはあらゆる国語によつて翻訳され、世界文学として愛読されるにちがひない。ただし、最高の国民文学は、世界文学に通ずるのである。

ここでは、「国民文学」の対象となる「国民」の範囲を「内地」と「朝鮮」の双方を含むものとして捉え、そこにおける「国際語」＝共通語として「日本語」が位置づけられていることがわかる。ただし重要なのは、そのような行文が一方で、「日本語」をあくまで「国民文学」というジャンルに限定された創作言語に止め、「国民文学」以外の、例えば「世界文学」というジャンルをも視野に入れつつ、更には「朝鮮語」で書かれるべき文学を「国民文学」以外の領域に担保する言説ともなり得ている点なのである。すると、ここにおける日本語使用とは、あくまで「国民文学」を指向する書き手が、自主的に「共通語」を選択した結果として意味づけられていることになるだろう。

更に、「座談会 今日の半島文学」（『緑旗』一九四三年五月）には、張赫宙^{チヤンハクジュ}の内地文壇デビュー期へ回顧的に言及しながら、過去の自身における日本語創作への野心とその挫折、及びその後の朝鮮語創作の経緯にふれ「国語に未練があり、何とかして広い舞台に出たかった」とする牧洋の発言も確認できる。ここからは、日本語使用によってアクセス可能となる文学マーケットの大きさに着目し、その点に日本語創作の価値を見出す牧洋の言語認識が確認できるだろう。

即ちこれらの言説からは、日本語がもつ「国民文学」の形成に適した「共通語」としてのステイタスや、市場価値の高さへの指向性が明確に確認でき、牧洋における日本語使用へのスタンスとは、そのような側面をも含む多層性において把握されるべきものであることがわかるのである。そこで重要となるのは、そのような具体的かつ限定的な目的に応じた日本語使用については、仮にその目的が変更や放棄をされた場合には、それを手放すことも可能となり得る点である。それは即ち、言語使用に関して個人の選択を必須要素とする「道具的」とよぶべき言語観^{（二）}として換言できるものだろう。

すると、本論が検討してきた『善霊』の批評性とは、そのような個人の選択に応じた言語使用の「道具性」を否定し、生活の全領域にわたり個人における選択の余地がないものとして日本語使用を義務づける潮流と、更にはそのような事態をより一層強化する文壇状況の展開に向けられたものであったと理解可能になるのである。と同時に、右の如き日本語への多層的なスタンスは、牧洋に、一旦は『静かな嵐』において積極的に関与した日本語使用と「皇民化」との

結びつきについて、それを他の観点から相対化する余地を保持させるものとなり、^{（三）}そのような言語観が『善霊』における自己批評性を用意した要因の一つであったと理解できるのである。

右の如き「道具的」な言語観の存在を視野に入れつつ、その点から一九四〇年代に日本語で書かれた文学作品を、「内地」と「植民地」さらには「外地」にわたり公平に比較対照すること。そのような試みは、この時期の「日本文学」への評価基準に対する新たな検討の地平を提示し得るものとなるだろう。そして更に、一九四五年以降の「日本」においては後景化されたであろう「日本語」への向き合い方を再評価し、今日のグローバル化を前提とした多言語状況において「日本語」「日本文学」が占めるべき立ち位置を模索する上でも有益な視点を提示すると思われる。

《注》

- （一） 牧洋は李石薫^{イソク}（本名は李錫濂^{イソク}。一九〇七く朝鮮戦争時に行方不明となる）の創氏名であり、四一年後半期から筆名として用いられる。平安北道に生まれ、平壤高等普通学校修了後、二六年には第一早稲田高等学院に内地留学する。その後朝鮮放送協会、朝鮮日報社等に勤務する一方で朝鮮語による多様な傾向の創作を展開し、四〇年代以降多くの日本語作品を残した（白川豊「李石薫（牧洋）作品考」『朝鮮学報』一六〇輯、一九九六年、参照）。本論では、牧洋の伝記的情報に関してもこの論考を参照している。

(二) 『酔いどれ船』の青春（インパクト出版会、二〇〇〇年）

一二三～一二四頁より。

(三) 創作集『静かな嵐』（毎日新報社、一九四三年六月）に収録されたテキスト『静かな嵐』は三部構成となっている。その第一部の初出は『国民文学』（一九四一年一月）であり、第二部は『国民文学』（一九四二年五月・六月合併号）に『夜』という題目で掲載、第三部は『緑旗』（一九四二年一月）に掲載された。本論ではそれら三部を統括する、創作集『静かな嵐』に収録された『静かな嵐』を検討の対象とする。

一九四〇年一〇月に国民精神総動員朝鮮連盟から改組された朝鮮半島における戦時動員組織であり、以降四五年まで、日本の長期戦遂行にむけた銃後活動にまつわる諸問題の処理を行った（林鍾国著、大村益夫訳『親日文学論』高麗書林、一九七六年、九九～一二二頁参照）。

(四)

注四に書誌を紹介した著書の三二二頁より。
例えば中山和子氏は、作品に描かれた「時局にめざめる」というより押し流される主人公の戲画的他動性、それとあらはらな空虚な高揚、半島北部の講演会聴衆の根づよい冷眼」等に注目し、過熱する時局への否定性をむしろ顕示するテクストとして『静かな嵐』を評価している（植民地末期の朝鮮文壇と日本語文学（一）『文芸研究』六九号、一九九三年、二四三頁）。また、白川豊氏は「非常時局」に無理理解であつたり冷笑をみせる人々を非難するのではなく、主人公とその背後にいる李石薫自身がむしろ彼らに理解を示しながらも、

(五)

(六)

(九)

どうすることもできずに苦悩し慟哭しているように見える」点を、この作品の特質として指摘している（「牧洋・作『静かな嵐』について（解説）」『静かな嵐』ゆまに書房、二〇〇〇年、五頁参照）。

(七)

一九四一年一月から四五年五月までの発行が確認されている。四二年二月号と三月号には朝鮮語文献が確認できるが、それ以降は日本語文章のみが掲載されている。発行は人文社（京城）より。緑蔭書房による復刻版がある。本論では『善霊』の引用本文をこれに依拠している。

(八)

一九三九年一〇月に結成された文学者の団体であり、「国民文学」の建設、「総力戦遂行」への積極的協力等を掲げ、組織的な親日文学活動を展開したとされる。四三年四月には朝鮮文人報国会へと吸収された（『朝鮮韓国近現代史事典第二版』日本評論社、二〇〇六年、三一〇頁より）。

崔載瑞『転換期の朝鮮文学』（人文社、一九四三年）所収、「国民文学の立場」と、金允植著、大村益夫訳『傷痕と克服』（朝日新聞社、一九七五年）所収、「日帝末期韓日文学界のかかわりあい」を参照。また俞鎮午「主題から見た朝鮮の国民文学」（『朝鮮』一九四二年一〇月）では、「国民文学」の実作傾向が（特に小説に関して）、「日本精神」と「内鮮一体」の勝利を高調する「思想文学」や「歴史文学」、あるいは「内鮮間の恋愛」「銃後国民の日常生活」「東洋精神の意義」「戦時下における知識階級の動向」をテーマとした作品群、および「農民文学」「開拓文学」等に分類され、『静かな嵐』は「思想文学」の代

表作とされている。なお「内鮮一体」とは、日中戦争の開始以降、朝鮮の兵站基地化を実現するために、半島に暮らす人々を精神的な側面で「日本人化」することを試みた諸政策に関するスローガンの総称である。

(二) 注九に出版を紹介した崔載瑞の著書のうち、「国民文学の作家たち」より。

(二) この傾向は、作品の冒頭における「問題は朴泰民が私であるか、私でないかにあるのではなく、『彼と私』とが、厳然として、二つながら存在することにあるのである。つまり彼と私とは同一人でありながら、場合によつては二人の人間に分裂する所に、悲劇もあれば苦悩の深淵もある」という行文などにも認められる。なお『静かな嵐』における主人公には、自身の「皇民化」への投企が周囲から肯定されるか否かに関する懊悩はあるものの、そこで自らの意図と行動の間における二面性に悩む事態は認めがたい。

(三) 一九四二年五月六日に国民総力朝鮮連盟が決定した「国語普及運動要綱」には、その「趣旨」として、「本運動は半島民衆をして確固たる皇国臣民たる信念を堅持し一切の生活に国民意識を顕現せしむる為悉く国語を解せしめかつ日常用語として之を常用せしむるにある」という文言があげられている。

この要綱は同年五月七日付けの『京城日報』朝刊等に掲載されるとともに、以降の「国語普及運動」および日本語政策の基軸をなしたと考えられる。なお、同要綱には、「文化方面に対する方策」もあげられているが、これについては「文学、

映画、演劇、音楽方面に対して極力国語使用を勧奨すること」という言及に止まっている。なお、その実施過程における徴兵制施行との関連については、宮田節子『朝鮮民衆と「皇民化」政策』（未来社、一九八五年）のうち「Ⅲ徴兵制度の展開」

や、井上薫『日本統治下末期の朝鮮における日本語普及・強制政策』（北海道大学教育学部紀要「七三号、一九九七年」）に詳しい。また「国語普及運動」の実施過程における各行政機関の動向や、新聞・雑誌報道の傾向、及び日本語使用をめぐる賞罰の具体例等については、熊谷明泰『朝鮮総督府の「国語」政策資料』（関西大学出版部、二〇〇四年）と、「賞罰表

象を用いた朝鮮総督府の「国語常用」運動』（『関西大学視聴覚教育』二九号、二〇〇六年）を参照。

(三) 南富鎮『文学の植民地主義』（世界思想社、二〇〇六年）所収、「第二章 植民地の言語空間」のうち、特に一〇一〜一〇四頁参照。また注四に書誌をあげた林鍾国氏の著書では、件の時期の文壇情勢にふれ、一九四一年前後から登場した作家群の特色として「朝鮮の特殊性問題を別に論じなかった」点が指摘されている（『新人作家論その他』参照）。また、特に一九四三〜四四年の文壇情勢については、石田耕人「決戦下文壇の一年」（『国民文学』一九四三年二月）、および「今年の新人群」（『国民文学』一九四四年二月）等も参照。

(四) これらの傾向は『静かな嵐』が発表されはじめる一九四一年後半期から既にその端緒を確認できるものである。本論では、『善霊』が発表される四四年前半期にかけてそれらがより明確

な動向となる過程において、牧洋が自身の日本語創作を見直す契機となった諸要素として件の諸傾向を把握している。

- (二五) そのような立ち位置は、本論が検討対象としたものの以外の(朝鮮語文献を含む)諸資料を更に視野にいれるとき、その内実をより精緻に把握でき得るものであるだろう。この点に関しては、今後の継続的な検討課題としたい。

- (二六) そのような移行は、例えば金允植氏における崔載瑞に関する議論と対照するとき、更にその特質を明らかにする。氏は一九四〇年代における崔載瑞の活動を、「論理を放棄した信念としての日本精神」への傾斜(注九に書誌をあげた著作の三七(三八頁より)という視点から論じている。そしてそのような傾斜を促した背景として、「朝鮮」の独自性が抹消されることに対する「恐怖感」の存在を指摘し、そのような「恐怖感」を共有していた同時代作家として牧洋の名をあげている(同書、一八一頁など)。すると、そのように崔載瑞と共通する「恐怖感」のもとで『静かな嵐』を執筆した牧洋が、四四年に至り(本文中で紹介した「まつろふ文学」とは全く異質な)『善霊』のようなテキストを残すに至ったことの独自性が理解できるだろう。

- (二七) それに関する基本的な言及と分析については、三枝壽勝「一九四〇年代前半期の小説について」(『朝鮮学報』八六輯、一九七八年)、および注一で紹介した白川氏の論考を参照。

- (二八) そのような言語観は、一九四三年まで京城帝国大学に勤務した時枝誠記による、「主体」の機能を重視する独自の言語理論

と対照される価値をもつだろう。その詳細については別論で検討したい。

- (二九) 本論では牧洋の日本語使用の機構について、件の多くの層のうちのいくつか、折にふれて作品の表現とともに前景化するものとして理解している。なお『善霊』における日本語使用に関しては、牧洋が一九四三年八月より満州へ移住し、満鮮日報社に勤務しながら、アジア太平洋戦争の終結までをその地で過ごしている点も重要となる。この点に関しては、四三年以降に発表された牧洋の日本語作品の分析を軸とし、当時の満州における日本語認識の傾向までを視野に入れながら、今後検討を深めていきたい。

- 【付記】 本論は、科学研究費補助金(若手研究(B)課題番号二一七二〇〇七三)の助成をうけた研究成果の一つである。なお引用に際しては、基本的に旧字を新字に改めている。

(みやざき やすし・北星学園大学准教授)